

高専における 基礎英語力を効果的に向上させるための英文法書利用の勧め

— 英検に合格するために —

田村 聡子

はじめに

平成16年4月に全国の高等工業専門学校(以下:高専)が独立法人化された。それに伴い各高専が中期目標をたてることになった。著者が勤める釧路工業高等専門学校(以下:釧路高専)における一般教科英語の中期目標は本科5年の間に英語検定準2級に合格することと設定された。また、翌年の平成17年には本科の上に更に専門的な知識・技術を学ぶための専攻科(2年間)が設置され、その専攻科を修了するためには英検準2級に必ず合格することと定められた。つまり、英検合格は本科では目標であるものが専攻科では修了要件となり卒業するための必須の条件となってしまった。

独立法人化に伴い突然打ち出された英検準2級取得という目標は釧路高専にとっては決して容易く達成できるものでもなかったし、今でもない。生粋の理系の教育機関であった(ある)高専において英語はあまりスポットライトを当てられる教科ではなかった。普通高校生であれば厳しい大学受験を通過しなければならないが、その必要のない高専生の英語力は中学レベルからのやり直しをしなければならない程度のものである。(少なくとも釧路高専の場合)。高専は普通高校と違い、同じ教科書を使っている教える内容も方法も各教員によって異なり、各教員の裁量に任せられている。故に、本科2学年(高校2年に相当)において英検準2級合格というゴールは同じであっても英検対策のアプローチの仕方は担当教員によって異なる。著者は独立法人化された平成16年に釧路高専に着任した。つまり、着任時からこれまでの間、本科・専攻科の両コースにおいて英検対策のための授業づくりに取り組んできた。そしてその期間著者は釧路高専生の基礎英語力の低さに戸惑うことが多かった。そして学生たちがどのようにすれば英語の基礎の定着を図ることができるのか常に頭を悩ませてきた。そこで思いついたのが著者

自身の学生時代の英語学習法である。それは英文法書をフルに活用するという方法であった。

本稿では、著者が実際学生に英文法書を利用して英語学習を行った場合の成果と利点を3名の学生の事例を紹介しながら述べたいと思う。

1. 本科1年で英検2級に合格

平成17年入学の1年生(釧路高専情報工学科)の女子学生が初トライで英検2級に合格した。準2級は中学時代に既に合格していた。彼女の勉強方法は英検の過去問題を解きながら、理解できない問題に遭遇したときには必ず文法書を丹念に調べるというやり方だった。もともと英語が得意で、好きであるという好条件があったとしても1年生になりたてで2級に合格したのは十分立派である。

彼女の場合は中学の頃から自ら文法書を使い始め英語力を伸ばしてきた。次の目標として英検準1級取得を目指しているので、現在は英検対策の一環として、中学時代の文法書よりもアップグレードした文法書を使い、英検の学習には必要とされている文法項目を深く掘り下げてノートにまとめるように指示している。

2. 専攻科1年生A君のケース(釧路高専専攻科 情報生産システム学科)

現在(平成20年)釧路高専専攻科2年生のA君は昨年1学年時に準2級に合格して専攻科の修了要件を早々に満たすことができた。彼は釧路高専本科からストレートに進学してきた学生である。実は、彼は本科5年生のときに準2級を受験していたが合格を果たすことができなかった。専攻科に入り著者の担当する必修英語の授業(英検対策授業)を受け、授業内で課された演習問題や、英検実施日までの4週にわたる模擬試験に出された文法問題を文法書を利

用しながら小まめに調べ上げレポートにまとめて提出していた。レポートは添削してやり、彼ひとりでは文法書のどの文法項目を調べてよいのかわからないのだろうと思われた箇所はその都度赤ペンを入れヒントを与えてやるようにしてやった。結果、専攻科1年になって初めてのトライで合格を果たすことができた。彼は本科4年生のときにTOEICを受けていたが、そのときの点数は330点であった。それが英検に合格したあとに再度挑戦して370点にアップした。TOEIC370点というのは一般的にみると決して高い点数ではないかもしれないが、釧路高専生の英語力の実態から考えるとこの40点アップは大きなジャンプなのである。

3. 専攻科1年生B君のケース(釧路高専専攻科 情報生産システム学科)

B君もA君と同様本科からの入学生である。ただし、A君は本科では電子学科であったのに対し、B君は電気学科で本科をいったん卒業して就職していた。釧路高専専攻科には専攻科が設立されて2年目の年に東京での仕事を辞めて入学してきた社会人学生である。彼は、本科時代は専門科目の勉強に専念し、英語にはあまり関心がなく英検も受けることなく卒業した。専攻科一年次に第1回英検を受験したが残念ながら不合格。2回目の挑戦で合格を果たした。彼が一度目で合格できなかったのは、A君のように演習問題や模擬試験の不正解問題の文法を調べることをせず、'勘'に頼って試験に臨んでいたことにあった。これは多くの学生が陥りやすい学習パターンである。英検は選択問題であるが故に丹念に文法を調べずとも'何となくこれっばい'と感じた答えを選んで、たまたまそれが当たってしまうことがあるため、その安易な方法へ流れてしまうのである。しかしB君はこの間違った方法に気付いた。彼は必修英語の第1回目の授業から最期の授業までに配布された授業内テストと演習問題のすべてと、模擬試験に出された問題で不正解だったものすべてを文法書を使いながら根気よく解きなおしていった。解きなおしレポートはA君の場合同様添削して赤ペンを入れてやった。その結果、B君は第2回英検で合格を果たし専攻科修了要件も満たすことができ安心して自分の専門の研究に専念している。

4. 文法書を利用することの利点— 学生たちのコメントから

上記に挙げた3人の学生たちが自分たちの経験を通して文法書を利用することの利点を挙げてくれた。それらは大まかに5点にまとめることができた。

- ★a 文法の構造を理解してから関係する問題を確認するので効率よく学習できる。
- ★b 利用者からの視点から解説してあるので分かりやすく、いろいろな例文が載っているので文法の理解を深めることができる。
- ★c 何回でも基礎に返って学習することができる。
- ★d 間違えやすい箇所には印が付けられていて頭に入りやすい。
- ★e 各文法の発展編の問題例も掲載されている場合もあるので文法力の伸張を図ることができる。

5. まとめ

著者自身、学生時代に文法書をフル活用して英語の学習をしていた。上記の釧路高専生が★cで述べているように、何度も繰り返し文法書を調べることで英文法が自分の頭の中に定着していったと思っている。それが故に学生たちにも文法書の利用を勧めている訳だが、まさにそれを実体験して文法書利用の利点を実感してくれた。もちろん、釧路高専生の英検合格者全員が同様の方法で英語力のアップを図っている訳ではないが、少なくとも文法書を利用して学習している学生たちはその効用と効率の良さを実感しているし、成果も出している。もし、彼らが英検合格後も同様の方法で英語の勉強をコツコツ続ければ(残念ながら、多くの学生は英検合格後英語の勉強を怠るようになる)気付かぬうちに確実に英文法が彼らの中に定着していこう。

彼らの挙げたコメントに2点ほど付け加えたい利点がある。それは★bと★eの追述になる。まず、1点目に、いろいろな英文を読む(★b)ことでその文法がどのような場面、状況でどのような使われ方をするのかを自然に学ぶことができる。多くの英文法の公式はある一定の文脈で使われる傾向があるが、それを頭にインプットすることができるという訳である。2点目に、文法書に掲載された各英文法書の発展編の例文(★e)には役立つ英単語が使われていることが多い。これは全く付加価値的利点である。英語力の高い、あるいは英語が得意である学生なら

ば発展編以外に余録的に掲載されている上級編文法の説明も彼らの好奇心を大いにそそるものになると思われる。残念ながら、これらの利点は基礎力定着を第1目標にしている釧路高専生にはまだ達し得ない域の利点であるが。

価格的にも千円台でこれだけの利用価値のある英語の参考図書はないであろう。自分はこの2, 3年、学生たちに出直し英語の勉強として文法書の利用を勧めてきた。項目4に挙げた5つの利点は英語の基礎知識の習得、定着そして応用力の育成に非常に役立つことは事例に挙げた学生たちの成果をみていただければ明らかであると思う。学生たちには数冊の英文法書を推薦しているが、その中で学生たちが見やすい、読みやすいと感じるものを使うように言っている。推薦書の中には数研出版の「チャート式ラーナーズ高校英語」も入っている。文字が大きめで重要箇所がカラーになっているのでとても見やすい。英文法の解説項目の範囲も十分にカバーしている。文法書は学生たちが自学自習するための大きな役立ち本となると強く信じ、これからもより多くの学生たちに利用するよう引き続き勧めていきたいと考えている。

参考文献

- 石黒 昭博(2005)「総合英語 Forest」桐原書店
江川 泰一郎(1994)「英文法解説」金子書房
田中 実(2005)「チャート式ラーナーズ高校英語」
数研出版

(釧路工業高等専門学校准教授)